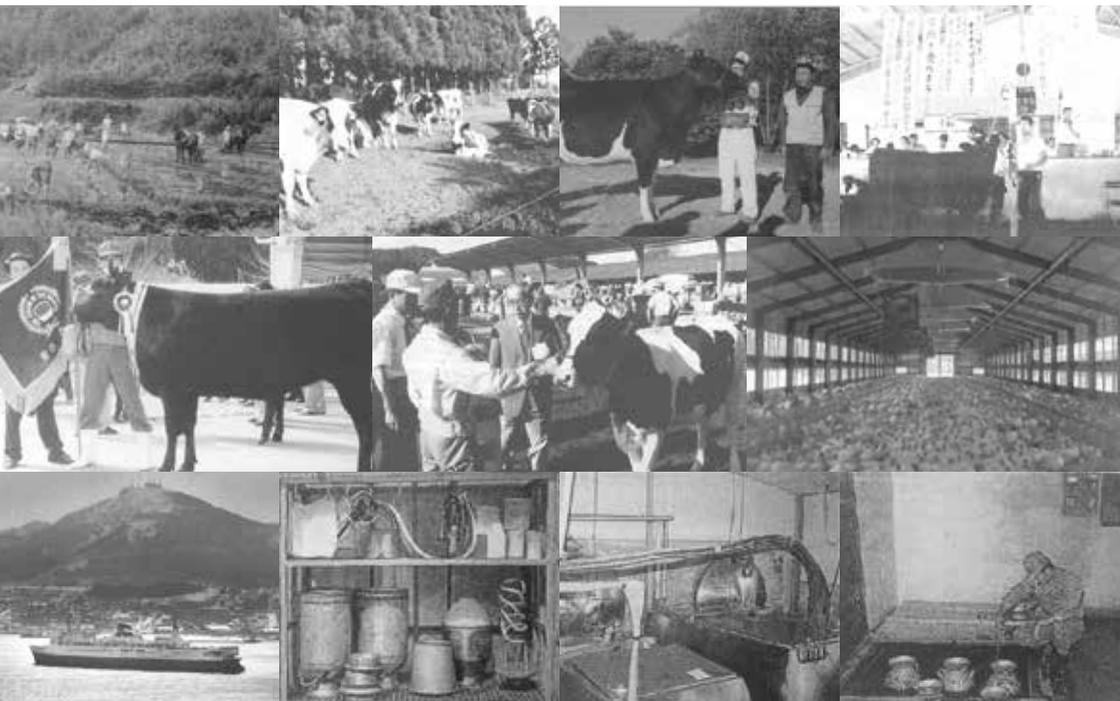


のじりききがき

— 畜産物語 —

フロンティア精神で大躍進！地域を支える畜産業



宮崎県小林市旧野尻町のフロンティア精神と共に在る暮らしを紹介します。

のじりききがき
— 畜産物語 —



のじりききがき —畜産物語— フロンティア精神で大躍進！地域を支える畜産業

畜産の歩み	P.03～P.06
前例がなくても挑戦する。団結して切り拓いた畜産の未来	P.07～P.10
不利な条件を乗り越え発展した酪農業の軌跡	P.11～P.16
農業の副業から基幹産業へ発展した養豚・養鶏	P.17～P.22
和牛のオリンピック三連覇へ挑む	P.23～P.24
あとがき	P.25～P.26

「フロンティア精神実践のまち」として、
農業、園芸、畜産などと、発展してきた、
宮崎県小林市旧野尻町。
合併により町の文化や歴史が薄れゆく中、
野尻に暮らす人々の視点から
町の歩みを語り継ぐ
「のじりききがき」第二弾。
「宮崎牛」として全国和牛能力共進会で
日本一に輝いた和牛を始め、
酪農、養豚、養鶏を中心に、
野尻の「畜産」の物語を紹介します。



のじり畜産の歩み

<明治～大正> 需要増加・発展し始める

明治から大正にかけて、
軍馬や運搬用、
農用など使役目的だけでなく、
用畜（肉・卵・毛・乳・子などを
得るために飼育すること）
目的も増えた。

戦争需要や食生活の変化により、
牛馬の生産を中心に
畜産の需要が高まった。

資本主義経済の中で
農産物の商品化が進み、
農業者の業としての畜産が
発展し始めた。

1914（大正3）年
東麓に野尻種付所が開設した。



1926（大正15）年
西諸県群畜産組合は、常設家畜市場として、
野尻分場と高原分場を開設した。



使役馬が活躍した頃の田植え風景

<昭和>戦前 発展と農業経営改革

1931（昭和6）年
有畜農業奨励規則が公布され、
畜産の発展と農業経営の改善が図られた。

1936（昭和11）年
県種畜場内に、役馬利用指導者養成所が設置され、
青年学校の女生徒や、
出征した戸主の代理で一家の働き手になっている
夫人らを対象に、
馬耕技術訓練を実施した。

<昭和>戦後

1947（昭和22）年
長岡養鶏場が500羽から始めて、
二千羽まで増羽。

のじり畜産の歩み

<昭和>戦後 用途変更・効率化と規模拡大

1948(昭和23)年
当時の東麓運道場にテントを張って、
春と秋に子牛のセリ市が開催された。

1950(昭和25)年
児湯郡川南町から3頭の乳牛を導入し、
酪農・乳牛が始まる。
溝尻牧場が開設され、搾乳・殺菌、
市乳販売が行われた。

1953(昭和28)年
大塚原に家畜市場が新設・移転。

1957(昭和32)年
肉豚の共同出荷が始まった。

1961(昭和36)年
和牛は役用牛が肉用牛と位置付けられる。

1966(昭和41)年
小林に家畜市場が移転。

1982(昭和57)年
第4回全国和牛
能力共進会にて、
野尻町から出品された
和牛が農林大臣賞に輝く。



2008(平成20)年
「野尻町畜産史」発行



<平成>

2012(平成24)年
第10回全国和牛能力共進会で、
宮崎牛が口蹄疫により
多くの牛を失ったという厳しい条件のもと、
9部門中5部門の優等主席に加え、
第7区の総合評価群における内閣総理大臣賞、
さらに団体賞で1位を獲得し、2連覇を達成。
野尻の和牛農家も大きく貢献した。

前例がなくても挑戦する。 団結して切り拓いた畜産の未来。

幕藩時代から牛馬の生産が多く、
軍馬・運搬用・耕作用・堆肥用と
多目的な農用家畜として活用されてきました。
昭和30年代になり、農作業の機械化、
運搬は小型トラック等に切り替わり、使役馬は減少。
昭和36年、和牛は役肉用牛が肉用牛と位置付けられ、
昭和40年には肉用牛の飼養戸数は1550戸とピークを迎えます。
元農協職員 齋藤國章さん、
元和牛振興会会長 小坂邦男さん・篤子さんご夫妻のお話を元に、
今日までの発展の軌跡を紹介します。



唐芋に代わるものを！ 農協・行政・生産者が団結

昭和40年、澱粉の輸入自由化で唐芋の価格が下がり、唐芋に代わるものを模索していた中、国や県の後押しもあり、肉用和牛生産の普及が始まりました。「農協・役場が連携して生産者をサポートする体制を作っていました。これは野尻の昔からの伝統として受け継がれている風土があるからできたことだと思っています。また、このころ様々なグループができて、自主的な勉強会が開かれていました。青年部も昭和40年から続いていますね。なんとかしよう、という気持ちが一人心ひとりにあつたのだと思います。その上で人と人がつながり、強い絆が生まれ今に

の人に手伝ってもらって全て人力でした。こげなこげなと続かん、と2人で話し合つてやつてみようと思いましたが」「その都度その都度、牛と向き合いながら」「取り組んだ結果、全国から多くの人が見学に来た。当時の安部晋太郎農林大臣も視察に来た。全国的にも革新的な取り組みとなりました。また、多くの研修生も受け入れてきました。「今でも遊びに来られる子もいてね」と研修生とのたくさんのお話を聞きました。

「母ちゃんのおかげ」 家族と仲間の絆が支えだった

小坂さんは畜産業界、町の発展のため、育種組合長や教育委員など様々な役

続いています」。

齋藤さんの話から、今日まで受け継がれる強さの秘訣を感じました。



齋藤國章さん
昭和40年農協入社
実家の牛を養いながら
定年退職まで
「畜産一筋」で
勤め上げた

日本初の牛の多頭飼いに挑戦 農林大臣も視察に訪れる

昭和45年、和牛の繁殖モデル事業として、全国的にも例のない牛の多頭(30頭)飼いに挑戦したのが小坂さんご夫妻でした。

「それまでは麦と唐芋などを作っていました。ビール麦40俵、1俵60キロ。今のように機械がなかったから、近所

を務め奮闘してきました。

「母ちゃんがいなくてできなかったね。何も言わずに牛の世話も家のこともやつてくれたからね。難儀かけた、ほんとに」「邦男さん」「見かねた息子が『母ちゃんが倒れてしまおう！』と怒ったこともありましたが。なんでかやつてくれました。昔は牛の友達も多くて、みんなで集まって勉強会をしたり。優等賞をもらったら飲んかたよ。そういうつながりもあつて楽しく頑張つてくれました」(篤子さん)。



小坂さんご夫妻
部屋には数え切れないほどの
メダルや賞状、トロフィーが
並んでいた

不利な条件を乗り越え 発展した酪農業の軌跡

昭和25年、川南町から3頭の乳牛を
導入したことから始まった、酪農の歩み。
元野尻町農業協同組合職員の境良彦さん、
酪農農家の谷口義廣さんと山崎政志さんのお話を元に、
酪農の軌跡を紹介します。



貨物列車で一週間かけて 牛を買い付け

昭和30年西諸島地域が「霧島集約酪農地域」に指定されたのを機に、乳牛の導入推進が始まりました。そのころ農協へ入った境さんは、家畜人工受精師の資格を持ち、獣医と一緒にお産に立ち会うなど「当時は乳牛の人工授精をする人がいなかったから、いろいろなことをしました。」

昭和37年「農業構造改善事業」が実施され、町内全域に北海道から乳牛50頭が導入されました。

「貨物列車で牛を養いながら運びました。函館から青森に渡る青函連絡船は一定以上の波があると貨物車は出せない決まりで、足止めになることも多

く、北海道への買い付けは長いと一週間かかることもありましたね。」(境さん)



本州と北海道をつないだ青函連絡船



元農協職員
境良彦さん

百五十戸を超える広がり

これらの導入により乳牛の数が増え、農家の戸数も多いときは150戸までになり、生産乳量が増加していききました。もともと乳牛は涼しい気候を好み暑さに弱く、高温多湿な土地では育ちにくいと言われること、搾った牛乳が高温により腐敗しやすいという問題があり、県外への輸送販売が必要となったとき、品質を保つため乳質の改善が急務となりました。簡易集乳所が町内各所に設置され、さらにトップクーラーの導入や飼育時の努力などで、乳質は格段と良くなりました。現在、酪農農家の戸数は少なくなっていますが、1戸30〜40頭と多頭飼いとなり、町内の乳牛の数は増えています。



ユニッククーラーで冷却する水槽式の簡易集乳所



(上)搾乳器具、
(下)バルククーラー

親子で全国共進会へ出場

父の跡を継いだとき酪農をやるなら
ところんやろうと決め、規模拡大を
しながら共進会にも出させてもらい
ました。今は息子夫婦が中心にやっ
てくれています。息子が高校生のと
き、全日本ホルスタイン共進会に一緒
に出たんです。その後4回も出場でき、
次回は宮崎開催かと言われているの
で、そこを一緒に目指していきたいです。



酪農家
谷口義廣さん



共進会に出場した谷口さん親子

酪農のおかげで今がある

3人の子どもを大学まで出せたの
は酪農のおかげだと思っています。
息子の一人は現在獣医として牛の
お産や受精などをしています。小
さいころから牛が好きで遊び場が牛
小屋でした。酪農に携わっている姿
を見られるのは嬉しいですね。



牛乳瓶の蓋（※画像はイメージです）
メンコとして遊び道具にもなっていた

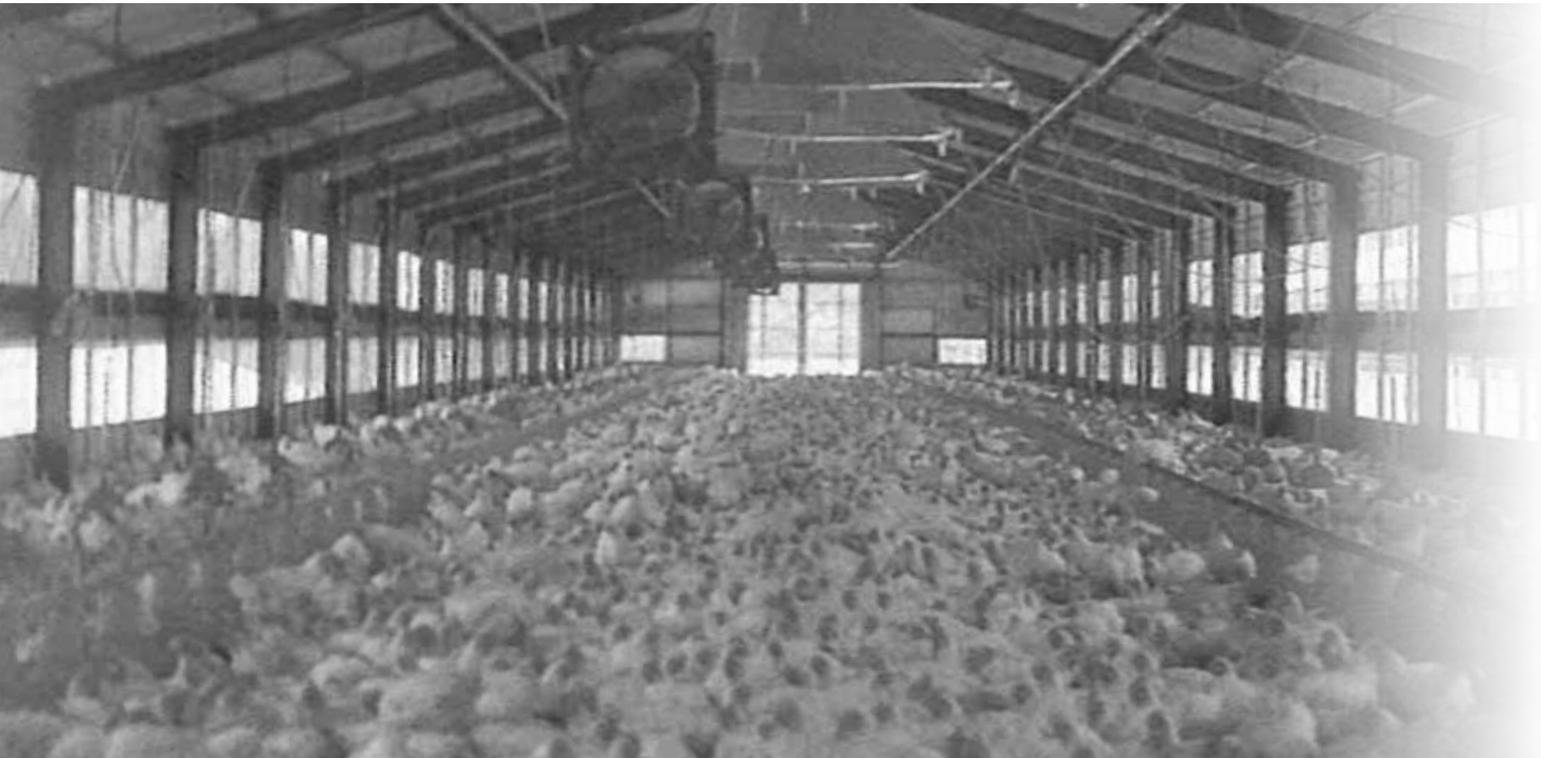


酪農家
山崎政志さん



農家の副業から 基幹産業へ発展した養豚・養鶏

小規模副業から大規模専業へ発展してきた養豚・養鶏の歩みと、
養豚業を営む嶺石藤男さん、
養鶏業を営む芝原靖彦さんのインタビューをお届けします。
また、文化遺産として伝承されてきた、
馬頭観音について紹介します。



馬頭観音

馬の保護神として
信仰され、
人々の親睦を深める
聖なる地として存在し、
伝承されてきた
文化遺産。
町内には41箇所
祀られています。



松山検査場馬頭観音。毎年4月の総合畜産共進会とともに、神仏両方式による祭事が行われている。



切畑馬頭観音。現在は4月15日を中心に日曜日に切畑集落全員で清掃と参道の整備を行っている。



小規模副業から 大規模専業へ

養豚・養鶏ともに、もともとは自給目的、農家の副業として増加してきました。「私が農協に入った昭和40年代は、庭先に豚や鶏がいる風景がよく見られました。当時は子豚のセリ市の開催や、貨車輸送で千葉の芝浦屠場への共同出荷も行っていました。」(元農協職員 庭山重廣さん)
養豚は昭和27年に526戸、昭和53年に240戸と多くの農家で副業に行われていました。その後、子豚の価格下落などから利益を出すために、生産から肥育、出荷まで一貫経営し、規模拡大する専業的多頭飼育の形態へ変化していきました。

養蚕から 新たな産業へ発展

養鶏は採卵目的の養鶏農家から始まり、昭和45年ころからブロイラー生産農家が増え、現在ではほとんどがブロイラーとなっています。昭和50年代ころまで盛んだった養蚕業は、桑の葉が採れる夏場しかできず、空いた冬場に養鶏をする形態が多く行われていました。その後、養蚕業の衰退とともに、養鶏一本(養豚や和牛に転換する人も)に切り替え、規模拡大する人が増えました。加工業や飼料会社など企業誘致が行われたことも追い風となったのです。

地域内で若い世代が

繋がる橋渡し役になりたい

父親の代から養蚕と和牛の複合農家をしていました。収益性などを考え、昭和61年に一貫経営で養豚農家を始めました。年々様々な病気が増え、倒産の危機にも合い、やめようと思ったこともありましたが、危機を乗り越え、その後2人の息子たちが帰ってきたことが大きな転機となりました。頭数を増やし設備を拡大し、みやぎ養豚生産者協議会（MPC）に加盟するなど活動も広がりが、平成24年に法人化することができました。現在は14名体制で母豚580頭、肥育豚6500頭を飼育しています。法人化して大変な

こともありましたが、地域の方々の支えもあり、社員が生懸命働いてくれて業績も伸び、懇親会などで社員の家族も一緒に楽しそうな姿を見られたときは嬉しく、拡大して良かったと思いますね。養豚農家は病気の心配から、今は地域内での農家同士の交流がほとんどありません。地域内でも養豚農家の若い世代が情報交換したり一緒に学べる機会をもてるよう、我々の世代が橋渡し役になっていきたいと思っています。



株式会社ピッグファーム 嶺石
代表取締役 嶺石藤男さん

消費者と顔の見える

関係を築きたい

農業高校卒業後2年間修行を積み、昭和57年、21歳のとき養鶏家として独立しました。最初は3万羽から始めて、現在は9万5千羽をほぼ一人で飼育しています。品種改良がどんどん進み、早く大きく育つようになった反面、病気になるやすく、病気になるまいよう、健康管理を何より大事にしています。一番気を使うのは温度管理です。微妙な温度の違いで体調に大きな変化が出るので、温度と空気のバランスを日々、様子を見ながら調整しています。鶏はとてぞデリケートなので365日目が離せません。この仕事は汗だくで汚れるし

忙しいですが、自分流のやり方でできることは醍醐味です。

消費者から信頼され、素敵な仕事だと誇れるよう、イメージ、見た目も大事だと考えています。農場に芝を張ったり花を植えるなど、気持ちや環境に余裕を持つことが良い鶏を育てることにつながると思っています。今後は、都会から人呼んで農家体験イベントを開催するなど、消費者と顔が見える関係を築いていきたいです。



養鶏家
芝原靖彦さん

和牛のオリンピック三連覇へ挑む

強さの秘訣 一致団結

2016年4月5日に小林市野尻総合畜産共進会が開催されました。5年に一度開催される全国和牛能力共進会(別名:和牛のオリンピック)を今年に控える、関係者の方々に話を伺いました。



日本一を牽引する

「産地を守る」生産者、行政、農協が一体となり、同じ方向を向いて取り組んでいることが、野尻支部の団結力、活気につながっていると思います。「日本一をリードしていく」という気持ちが強く、全共へ向けて一致団結して向かっています。

野尻庁舎地域整備課主幹
追間杉太郎さん

青年部の活躍に期待

高齢化、後継者不足で戸数は減っていますが、野尻支部の青年部は、とても頑張っていて、県内のほかの地域と比べても活気があり、意欲が高いです。一頭でも多く野尻から全共に出場できるよう、準備を進めています。

野尻町畜産振興会長
折田巖さん



全国の舞台に立たせたい

全国の舞台に立ったとき、県を背負っているという自信に溢れ、胸が高鳴りました。あの気持ちを若い人たちにも味合わせたい。自分自身も目指しながら、チーム一丸となって挑みます。

和牛農家 下村豊さん

日本一の削蹄師になる

牛削蹄師の仕事始めてから、牛を通して多くの人に出会うことができ、感謝と誇りを日々感じています。技術を磨き続け、削蹄師の全国大会で優勝し、農家さんや牛たちに恩返しをしていきたいです。

削蹄師・和牛農家 原田基行さん



家族の支えが源にある

父が倒れて急遽跡を継ぐことになり、手探りの日々でした。家族の支えがなければやり続けることはできなかったと思っています。家族や仲間たちと団結して、全共出場を目指して頑張ります。

和牛農家 二木伸之さん



生産者、農協、行政が一体となり取り組む和牛や酪農、独立して一貫経営する養豚・養鶏と、畜産の中でも様々な形態、様々な想いがあり、成り立っていることを感じました。今回紹介できたのは、全体のごく一部でしかありませんが、少しでも野尻の畜産について知るきっかけになれば嬉しいです。ご協力いただいた皆様、ありがとうございます。

昭和の始め、水路を引き開墾し、水田稲作の偉業を成し遂げた、田丸貞重翁や信時金之助翁から受け継がれる「フロンティア精神」。つまり、「なせば成る」「共同助力」の精神が、野尻の発展を支えている方々の中に脈々と受け継がれていることを、「メロン物語」に続き、「畜産物語」の取材を通して、改めて深く実感しました。合併して小林市に名前が変わりましたが、野尻の方々が歩んできた歴史や、営んできた生活文化を通して、「フロンティア精神」に代表される野尻の伝統文化を受け継ぎ、絶やすことがなければ、「野尻町」の歩みは絶えることなく、続いていくのではないかと思います。文化の火種を掘り起こし、受け継ぎ、広げていく大切さを改めて感じました。

小林市役所 地域おこし協力隊 細川絵美



Special Thanks

取材にご協力いただいた皆さま／JAこばやし／小林市役所野尻庁舎

参考文献

『野尻町畜産史』／『野尻町史』／『わたしたちの野尻町』／『町制施行20周年記念版のじり』

発行者(取材・執筆・編集)

細川絵美 (小林市役所 地域おこし協力隊)

Design

伊藤斉 (ITO DESIGN ROOM)